

主日礼拝説教「パンの屑を集める」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年7月5日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 23章23～32節

²³ わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。

わたしは遠くからの神ではないのか。

²⁴ 誰かが隠れ場に身を隠したなら

わたしは彼を見つけれないと言うのかと

主は言われる。

天をも地をも、わたしは満たしているではないかと

主は言われる。

²⁵ わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。²⁶ いつまで、彼らはこんなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、²⁷ 互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。²⁸ 夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。

もみ殻と穀物が比べものになろうかと

主は言われる。

²⁹ このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる。

³⁰ それゆえ、見よ、わたしは仲間どうしでわたしの言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。³¹ 見よ、わたしは自分の舌先だけで、その言葉を「託宣」と称する預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。³² 見よ、わたしは偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう、と主は言われる。彼らは、それを解き明かして、偽りと気まぐれをもってわが民を迷わせた。わたしは、彼らを遣わしたことも、彼らに命じたこともない。彼らはこの民に何の益ももたらさない、と主は言われる。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 5章2～11節

² ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。³ 割礼を受ける人すべてに、もう一度ははっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。⁴ 律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。⁵ わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、「霊」により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。⁶ キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。⁷ あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか。⁸ このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。⁹ わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。¹⁰ あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとしてあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁きを受けます。¹¹ 兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣傳伝えているとするならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣傳伝えれば、十字架のつまずきもなくなっていたことでしょ。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章14～21節

¹⁴弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。¹⁵そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。¹⁶弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。¹⁷イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。¹⁸目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。¹⁹わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。²⁰「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、²¹イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

パンの屑でいっぱい【こども説教のために】

主イエスが弟子たちと共に旅をして町々を巡られた日々は、常に慌ただしいものだったと言います。どこの町に行っても、多くの人々が押し寄せて来ては教えを乞うたり、病人や悪霊に憑かれた者を癒してもらおうとしたからです。弟子たちを休ませようとして人里離れた所へ行った（マルコ 6:31）ときにも、多くの人々が先回りして一行を待っていたほどでしたから、主イエスは彼らに教えるばかりか、皆に食べ物を与えないわけにはいかなかったのです。そのときには、そこにあった五つのパンと二匹の魚を裂いて弟子たちに配らせ、五千人の人々を満腹させられました。

そのような主イエスと弟子たちの旅の中で、舟に乗って湖を渡るときは、彼らだけで過ごす貴重な時間になっていたかもしれません。そこで休息を取り、ゆっくり食事をすることもできたでしょう。ところが、あるとき、弟子たちはパンを持って来るのを忘れて舟に乗り込んでしまいました。そのことを気にしていると、主イエスは言われたのです、「覚えていないのか。わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか」。謎解きのような言葉です。弟子たちにも主イエスがおっしゃることがすぐには分からなかったかもしれません。ただ、彼らは思い出しました。主イエスが五つのパンを裂いて分けてくださったとき、皆が満腹して、その後には十二の籠いっぱいのパンの屑が集められたのです。同じようなことが、七つのパンを四千人に分けてくださったときにもありました。そのときには、七つの籠いっぱいのパンの屑が集められたのです。

主イエスがお与えくださり、分かち合うようにしてくださるパンは、わたしたち皆の者を満足させてくださるでしょう。それだけでなく、満足した者たちの中に、なおたくさんパンの屑を残してくださるのです。その尽きることのないパンを、主イエスは弟子たちを通して、すべての人に届けようとしてくださっているのです。そのパンは、主イエスがお持ちなのです。

「パンを持っていない！」

「こどもの教会（教会学校）」では、毎年7月から8月にかけて「夏プログラム」と称して、一つのテーマに取り組む活動をしています。その成果は、毎年夏の終わりに、皆さんにも紹介してきました。今年は、「ソロモンと神の箱」というテーマで取り組もうとしています。「神の箱」は、モーセがシナイ山で神から授かった「教えと戒めを記した石の板」（出エジプト記 24:12）を納めて持ち運びできるようにしたものです。寄留地では、「幕屋」の礼拝所に安置していましたが、サウル王やダビデ王の戦争の時代には、「幕屋」も建てられず、一般家庭に預けられているような状態でした。それを、ダビデ王は、ユダとイスラエルの王になりエルサレムを都としたとき、都の丘に運び上げました。彼は、「神の箱」を安置する神殿を建てたいと願いましたが、その願いは息子のソロモン王の代に委ねられたのです。「こどもの教会」では、今年の「夏プログラム」で、そのソロモン王が建てた「神殿」を作ろうと計画しています。もちろん小さな模型ですが、できるだけ『聖書』の記述に忠実に作ろうと、奉仕者の皆さんと準備を進めているのです。

ソロモンが建てた神殿の中には、「神の箱」のほかにも、いろいろな祭具備品が置かれていたようです。それらは、基本的にはモーセが建てた「幕屋」でも同じです。おもなものは、香を焚くための祭壇、七枝の燭台、そして供えのパンを載せる聖卓（机）です。

イスラエルの祭儀では、「焼き尽くす献げ物」など動物の犠牲のイメージがありますが、絶えず供えられていたのは「パン」だったようです。「パン」は、「和解の献げ物」と呼ばれる礼拝で献げられるものの一つとしても規定されています（レビ記 2 章、7 章）。その「和解の献げ物」は、奉献者がそこで献げた物によって会食をする礼拝として規定されているものです。その作法の詳細は分かりませんが、キリスト教会が礼拝の中でパンと杯を分かち合う「聖餐」を儀式として整えてきた歴史の中で、参考にされたとも言われています。

主イエスは、「パンの出来事」をただ空腹の人々を満腹させる奇跡としてなさったわけではありませんでした。「パンの出来事」を通して、弟子たちに、大切なことをお示しになろうとされたのでしょう。けれども、弟子たちの理解は遅いものでした。弟子たちは、舟に乗るのにパンを忘れたことで主イエスを煩わせていると心配しました。わずかなパンで五千人を満腹させたお方であることを忘れたかのようです。その彼らの姿を見て、主イエスは嘆かれました。「**分からないのか。悟らないのか…**」と畳みかけられました。

弟子たちは打ちのめされたかもしれません。正直に言えば、わたしたちも、打ちのめされた気分になります。弟子たちほどにも、わたしたちは、「パンの出来事」を理解しているようには思えないからです。

一つのパン

それでも、わたしたちは「パン」をいただきます。「主の祈り」で「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と祈るとき、わたしたちは、「パン」を求めているのです。

わたしたちには、パンが必要です。毎日の糧が必要です。食べなければ、生きていけません。毎日毎日、食べることに少なくない時間を費やすのです。食べ物を得るために働き、食べられるようにするために準備し、食べた後には片づけまでしなければなりません。それらのことを、自分がしなくても、だれかにしてもらわなければなりません。

弟子たちは、舟に乗るのにパンを持って来るのを忘れました。たまたま忘れたのでしょうか。彼ら一行は、しばしば舟に乗って湖を渡ることがありましたが、いつもパンを持って乗っていたわけではなかったのでしょうか。もしかすると、その日は、舟の上でパンを食べるつもりはなかったのかもしれませんが。けれども、主イエスが「**ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい**」などと話し始められたので、彼らは、主イエスがパンを食べるつもりでいらしたのではないかと思ったのかもしれませんが。ところが、彼らには、パンの用意がありませんでした。

不思議なことに、「福音書」は、そのとき「**舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった**」と伝えています。弟子たちはパンを持って来るのを忘れていたのですから、その「一つのパン」は、弟子たちの持ってきたものではありません。では、だれのパンだったのでしょうか。主イエスがお持ちだったのでしょうか。それとも、船頭か誰か同船者が持っていたのでしょうか。

実のところ、だれのパンでもよいのです。そこには、「一つのパン」がありました。主イエスと共に舟に乗る弟子たちのために、「一つのパン」は、確かにあったのです。

それは、主イエスが弟子たちに分け与えてくださるための「一つのパン」にほかなりません。そうです、「五千人のパンの出来事」のときにも、「四千人のパンの出来事」のときにも、弟子たち自身はパンを持っていませんでした。しかし、そこにパンが与えられ、主イエスはそのパンを裂いて分け与え、弟子たちに配らせたのです。その残りのパンの屑を、集めさせたのです。

わたしたちも、「聖餐」の食卓に着き、主イエスの手から「一つのパン」を分け与えていただきます。用意された「パン」を与えられて、わたしたち自身が養われるために、すべての人と分かち合うために。そして、そこから溢れてこぼれ出る恵みを、少しも無駄にしないために、わたしたちには、託された役割があるのです。残りのパンの屑を集め、用いられるようにする役割です。それは、主の食卓からパンを受ける者に与えられる役割なのです。